

最後の供出とはなったけれど、僅かばかりの荷物がいよいよ軽くなり、身ひとつになってしまった感じである。

安奉線橋頭駅への九キロの道は平らで、駅前には宮原の日僑善後連絡所から日中両国人の遺送委員数人が来ていて、臨時列車を用意し待っていてくれた。懇切なねぎらいのことばに、一同ただただ地獄で仏の思いであった。安東からの陸路引き揚げは、国共戦闘の激化した十月初旬第十一大隊をもって中止されあとしばらく海路によつたが、残留同胞の苦難はひどかった。

## 同じ船団中の一帆船に乗る

東京都 岩崎 重夫

### 安東市の事情

初めに安東市の事情について書いておきたい。

鮮満を境する鴨緑江の下流にある町が安東市（いま丹東市）。鉄橋により対岸の新義州を経て列車は釜山まで通じ、海を渡れば日本の下関市である（関釜連絡船が

あり）。

だから、敗戦の前後には一日も早く内地に引き揚げたいと奥地から大勢が目指した。目的どおり帰国できたのは初期の軍閥係ら一部特殊家族だけで、多くの避難民たちは三十八度線により北側に止められたり（理由が認められ満州に戻されたものもある）、また、鴨緑江を日本人は越えられなくなっておびただしい数の邦人が安東に停留雑居した。停留雑居したとは厳冬に向かい在住邦人家屋の空き部屋に難民が分宿、あるいは用心棒的に受け入れられ、さらに後で明け渡しを求められる家が続いたので複雑さを増して一年あまり過ぎた意味をいう。

まれに避難民中で大金を隠し持った特別な立場の者がいたようだし、また、古くからの在住者は財産を持ち、それ相当の準備もしていただろうけれど、長びく無職（特殊、あるいは技能者は別として商業者も経営を離れ）生活で蓄えも乏しくなり嫌な事件が幾つもあって、帰国にはやる心情は押さええようがなくなっていた。

翌年五月に入って、奉天ではコロ島港経由での帰国が始まったと伝わると、ひそかに六月には陸路奉天向け脱

出実行と、海路南鮮へ密航便が七月に出るうわさがあった。危険・無謀と思えるものもあったが、民主連盟（延安から来た元日本兵士の集団）の手引き、設営の分もまじっていた。

正規とみられた設営分も十月初旬で閉じられたというし、コロ島港経由も終了したらしいなって、秋の冷たさが寒さに変わるにつれ、いらだち始めたころの十月中旬過ぎて、急に『総員海路引き揚げ』が民主連盟から発表された。

二十三、二十四、二十五の三日間にわたり方を越す邦人が、北海道から九州の順で連盟員の指示に従い次々と帆船に積み込まれるという仕組みである。もうこの機会を逃したら大変だと全市の邦人がおおわらわになった。

私も難民の部類である。

熱河方面から身ごもった妻を伴い、無一物で安東にたどり着いたのは九月末、朝鮮に渡れなくなっているとは知らずして。

十二月半ばに体調が悪く急に高熱を発したので病院に行ったら、肋膜炎ですぐ水を抜かれ安静が必要だからと

部屋をあてがわれた。難民は無料と一階奥隅の小部屋であったが、妻もここで産むなら幸いと白炊して暮れを越した。（西川病院だったと記憶している。）正月十五日ぐらいに追い出された。理由は八路军が使用するからだとのことで、他の入院患者たちも同様だった。

雑居の家屋に再び戻り、まもなく二十六日に男子を出生。隣家の木戸産婆さんが二階の物干場越しに来てくれた。入り口からだどやたらに物騒な暴民が横行し集団で侵入する時期だったのだ。

困難なこうした当初五か月間を過ごせたのも、「五月に心召し帰郷命令で熱河へ戻る途中、難民団中の妻に遭遇しここへ来た。」という言葉だけで、見も知りもしないのに援助を示した熱河省の協和会にいた、会務職員先輩たち、海保正夫・松川平八・崎山信義・井東信夫の各氏と近隣の情による。

それなのに、病気で動けなかった間に、中共軍が日本人会を弾圧し解散を命じて全員を逮捕することがあり、役をしていた海保・松川・井東各氏らも東炊子（トンカンズ）監獄に入れられたとの悲報があった。加えて、私

自身が二月五日大雪の降る朝、突然武装した六人の将兵に土足で踏み込まれ、鉄道のガードをくぐった遙か六道溝の八路軍兵舎の施設に放り込まれた。四日間の拘留で済んだとはいえ。

運命の数奇である。もう頼るところもないし、食わんがために、住んでいた第五街公所の就職あっ旋掲示を見に行った。扉を開けたら中国語が通じて、「ここで働かないか。」と履歴書を書かされた。中国人の街長では日本人社会を治めるのに補助が必要で、『日僑管理員』と『助理員』の名称での日本人が置かれていた。変化の多い日本人の住民台帳整備は重要であり、転出入・出生・死亡・結婚などの記帳に『助理員』が既において、私は『日僑管理員』だといわれた。二人の給与は街長から手渡される。我々の立場上、街の経費として一銭も日本人から徴収しないで済んだのは仕事がしやすかった。

中央区は江岸通りから山の手に向かい十一の街があり、区公所（民主連盟）の召集で十一人の日僑管理員が顔を合わせるがあった。第五街は四と六と駅前通りの七街とを合わせ昔から賑やかな中心街をなし、特に五街の

二丁目半分が四街通りに面して大きな公設小売り市場（鉄筋建て、階上が住宅）で、日中は雑踏し、五丁目には元安東劇場の建物、そして、七丁目には珍しい日本人銭湯もあるほどで、邦人住宅がたくさんあり、それだけに難民受け入れもかなり大部な数にのぼった。

街公所は六丁目角から二軒めの建物に、また、区公所は七丁目角の以前は安東無尽銀行だったビルに位置した。（松岡氏の文中にある宮崎県代表の金子秀雄氏はこの専務）

矢継ぎ早に問題が起り、被統治の立場に変わった日本人層にとってはどれも処理は急を要し、真剣に立ち向かわなければならず、すべて隣組の班・組長の組織運営に頼った。班は丁目ごとに八まであったが、八丁目は早くに邦人無住地帯になる。

松岡信男氏は二班の班長になり加わった。というのは、家業が市場内の青果物商で、両親の元に満鉄をやめて、族と住んでいた。そして、敗戦直後の日本人会に出て、中共軍の一網打尽に遭い東炊子監獄に入り、新義州に移されソ連軍の取り調べも受けた釈放組（海保・松川氏ら

十八人)である。家族はほっとして、もう再び公の仕事にかかわらないように願っていたのを、要請により家族を説得したうえ班長を引き受けたのである。

班・組長会議は頻繁に開かれ、彼は控えめながら必要時にはまとめの発言をした。

街長は郭永寺(ゴウユンシ)といい、若い知恵と胆力があり、独身で街公所の二階に住んでいた。私が街公所裏続きの家の一間を借りて移り住んだのを彼は知り、食事の世話を頼み妻の作る総菜を喜んだ。また、ギョウウザを作り食わしてもらった。ある時、「自分は黨員だ。もう一人、第二街の街長がそうだよ。」と語った。そして、次第に過去を語り黨員になるいきさつを話し、終戦時には国際運輸の労丁だったと大きな掌をかざした。字は上手だった。

私は引き揚げ先を静岡県にしていたのに順番が初日の二十三日になったので、二十四日め分と二十五日め分の街の名簿を最終日乗船の松岡氏に託した。二十四日の晩に突然ガヤガヤして全船が岸を離れ江上にたむろした中の船上で、同夜半と二十五日の朝どんなに心配したこと

か。

私どものは帆船で小さく、百人が乗らないうちに一杯になった。他の僚船と同じように天候の災いを受けたが、嵐には木の葉のように翻弄され、凧には帆をだらんとさせて日を重ねるだけで、相当の苦勞と恐怖はあったけれど十二日たった夕刻遅く潮浦に上陸。北鮮だという緊張から夜闇を利用して静かに山を越え南鮮側に入って野宿。それは寒かった。朝目覚めたら霜柱が光り吐く息は白く、一同ぐったりしていた。三日間を廟らしい軒下に泊まられ、途中で私ら家族と少数の人が分離されて京城収容所に回された。

ここで機械船の沈没を耳にしたが、まさかその船に松岡氏らが乗っているとは。民間人はみんな帆船で、あの船はたぶん民主連盟などの使用だと思っていたのだから。

数日後に貨車で釜山送りされ、待っていた日本の汽船で長崎の南風崎(ハエノサキ)に着いたが、天然痘患者発生とのことで一か月間を港外に浮かぶ。

上陸して二日間は収容所で諸手続き、また、一人当たり千円と毛布一枚、そして、行き先までの切符を受け取

る（東京に変更）。懐かしい小さい汽車はだんだんすごい混みようになり、車中から明け方に焼け広場になった広島を通過、三島市で墓参りをすませ東京に入ったのは十二月二十七日。

どんなに松岡氏からの便りを待ったことか、こちらから数度ハガキを出して。

あの長文を受け取ったのは五月（四月二十九日の日付）。一気に読む。驚き、涙を流しながら。繰り返し幾度読んでも胸が詰まる。文中に出てくる人物は全部知っているのだから。互いに早く会おうと連絡しながら果たせず、彼は逝ってしまった。昭和三十四年十二月十四日、佐世保市において。生まれは本溪湖で、大正三年十二月三日。行年四十五歳。惜しい人だった。

田中宏氏は第二街日僑管理員だった。新京生まれで、経済部に勤め、敗戦間近に応召留守家族をまとめ引率者として安東に来た。そのまま世話をしていた第二街の日僑管理員になった。中国語が上手で、フィギヤースケートの選手だったと聞くほど機敏で明朗。管理員の会合の帰りは道連れし、分析や対応に役立った。

「二街の班長も党員だ。」と五街郭の街長から聞いたことは安東時代に私は言わなかったけれど、彼が「市政府の潘日僑管理課長は非党員だから忠誠を党に示すために、われわれ日本人にキンキン声を張り上げるのだ。」と言ったので、かなり情報をつかんでいる人だと思えた。

『総員引き揚げ』の説明を最後に聞かため区の民主連盟から呼ばれ、「この十一人の中から一人残ってもらおう。田中宏君に決まった。」と告げられた時、彼はただ軽うなずくだけ。既に交渉を受け承諾済みだったのだ。帰途、「妻が臨月だし……。」とさり気なく言うが、淋しげに見えた。「ご苦労様」としか言いようがなかったが、残るとすれば彼が最適任者だとだれもが思っただろう。田中宏君は大正六年十二月十一日生まれ、帰国後は初め仙台地方物産局に勤め、国税局に移って秋田市の税務署長を最後にやめる。

つらい役割

——班・組長と皆さんの苦労を思う——

畳の供出は学校などの建物が臨時の兵舎や病院になるさい求められ、当初は多かつたらう。少なくなっても、

余りがないので割り当ては苦痛だった。

労工要員・担架要員はどこへ行くのか日数もはっきりしないことが多い。

あふれる邦人を減らすため、五月ごろ寛甸方面へ農耕移民の募集があった。二千人近くの連中はどうなっただろうか。行く機会をつかまえ奉天方面へ逃亡すればよいとの冗談も出たが。

看護婦要員は非情だった。場所や日数も言わない。行ける境遇の独身女性がいる間はまだしも、仮装結婚も現れ、そういうことができない娘を持つ親御さんにとっては何となく苛酷で、本人も悲壮、恐怖ですらある。「〈鬼〉とののしられた。また、〈姉ちゃんを連れに来たア。〉と、泣いて妹が逃げ走るさまに、足がすくんでしまった。」と、実際に対面説得する立場にあった班あるいは組長はつらかったろう。

二班の市川班長が、自分から進んで労工に参加し瘦せて戻った。看護婦要員に二班の浜本組長が妹を、四班の近藤班長が娘を出した。順番になったからといって。

また、拳銃が出てきて届けたら、なぜ今までわからな

かったのかと、近所の男性全部と組長が市政府に出頭させられ一室に一日中閉じ込められ、暗くなってから帰されてきた。七班の辻班長は、私が雪の朝捕まる時たまたま来合わせていて、同居の男と二人が数珠繋ぎにされて四日間ぶち込まれた。家族は命が危ないと心配していた。日僑管理員の仕事は重大だった。

私は、街長が〈好人〉なので助かったことしばしば。人の供出には時に危険の度合いを尋ね、いわゆる満額で出す場合あり、逆に少数しか連れていけない仕訳をした。区公所が近いことも役立って集合状況の情報をとりつつ、時間切れすれすれの離れ技も演ずることができた。

## 孤兒と墓標式百五十柱

福岡県 江頭 ふみ子

私の亡夫は生前の名前を野島達夫と申します。満州国協和会撫順県本部事務長の要職にありました。終戦の年の五月、応召入隊と殆ど同じに中央本部より召集解除の